

恋緒を述ぶる歌一首 并せて短歌

三九七八番

妹も我も 心は同じ 比へれど いやなつかしく 相見  
れば 常初花に 心ぐし めぐしもなしに はしけやし  
我が奥妻 大君の 命恐み あしひきの 山越え野行き  
天離る 鄙治めにと 別れ来し その日の極み あらたま  
の 年行き反り 春花の うつろふまでに 相見ねば い  
たもすべなみ しきたへの 袖返しつつ 寝る夜落ちず  
夢には見れど 現にし 直にあらねば 恋しけく 千重  
に積もりぬ 近くあらば 帰りにだにも うち行きて 妹  
が手枕 さし交へて 寝ても来ましを 玉梓の 道はし  
遠く 関さへに 隔りてあれこそ よしゑやし よしはあ  
らむそ ほととぎす 来鳴かむ月に いつしかも 早くな  
りなむ 卯の花の にほへる山を よそのみも 振り放け  
見つつ 近江道に い行き乗り立ち あをによし 奈良の  
我家に ぬえ鳥の うら嘆けしつつ 下恋に 思ひうらぶ  
れ 門に立ち 夕占問ひつつ 我を待つと 寝すらむ妹を  
逢ひてはや見む